

誤答分析へのアプローチ*

——Wh 疑問文習得の過程と主語把握についての学習者の方略——

諏訪部 真**

序 論

学習者の誤りが新しい角度から問題にされ出してから10年以上経つ。そして日本においてもいくつかの実証研究が発表され、なぜ学習者の誤りが重視されなければならないかについて、共通の基盤が出来つつあるように思える。

しかし教えている生徒や学生にテストをし、誤りを集めることは教師であれば誰でも出来ることから、我々はややもすると安易に「誤答分析」を扱いがちな傾向がある。学習者たちの作文の中の誤りが集計されて表にされ、どれが正しく、どれが誤っているかが指摘され、どのようにいつ文法を教えたなら最高の結果が得られるかを問題にするだけならば、1920年、1930年代に米国で盛んであった「誤りの調査」と何ら変らないものになってしまう。

現在、英語教育で「誤答分析」を問題にする時、言語習得という大きな面から考える必要がある。そして、教授面での問題よりも学習者中心の分析でなければならないと思う。

構造言語学が盛んであった頃に学習者の母国語からの干渉をいかに排除するかを問題にするあまり、学習者自身のことを考えるよりも、教材の配列、教授法に大きな力を注いだのであるが、「誤答分析」の場合、外国語を学んでいる学習者に焦点をあて、彼らが外国語を学ぶ時にどういう工夫をし、外国語に対してどういう攻め方をするかを見なければならぬ。

かつて、対照分析によって外国語学習の困難点がすべて解決されると錯覚されたことがあったと同様に、「誤答分析」によって英語教育の問題点が霧散するという思い違いをしないように注意せねばならない。

1974年にデンバーで「誤答分析」をテーマとして開かれた ACTFL/AATSP/AATF 合同の大会で Corder の提案によってテーマがより大きな「学習者の言語」に改められたという Hanzeli の言葉は誤答分析は何を問題にすべきかを象徴的に表わしているように思える。そしてこのことは、その時講演をした Corder の次の文によく説明されていると思われる。

What we are really interested in, as a long-term objective, is to gain an insight into the process of second language learning and to understand something about the various strategies of language learners. In this sense it is clearly a learner-centered investigation we are concerned with and only secondarily would it be regarded as concerned with teaching. (P., Corder 1975)

「第二国語(外国語)の学習のプロセスへの洞察力」「学習者の種々の攻略法の理解」 Corder

* 昭和54年8月 全国英語教育学会第5回(群馬)大会において課題研究として発表

** 一般科英語 教授

原稿受付 昭和54年9月29日

の言うこの二つを誤答分析への手がかりとして論を進めて行きたい。具体的には筆者がすでに試みた「語順からみた誤り」の中の Wh 疑問文について学習のプロセスを、学習者の攻略法については現在調査中である「中学2, 3年生の主語把握」を資料にしてそれぞれ問題にしたいと思う。

2. Wh 疑問文の習得過程

2.1 母国語として習得される場合

Klima と Bellugi (1966) が18か月, 26か月, 27か月の幼児の言語発達を10か月にわたって記録した研究によると第1段階での幼児の疑問文は次のようなものである。

What that? What(s) that? Where kitty? Where milk go? What cow-boy doing?
この段階で幼児たちは疑問詞を使うけれど, What が目的語になっている文は理解できないでいることは母親と幼児の次の対話からも明らかである。

Mother: Well, did you hit? Child: Hit. Mother: What did you do? Child: Head.
Mother: What are you doing? Child: No.

第2段階で記録された発話の中の Wh 疑問文では疑問詞は文頭に置かれているけれど助動詞はまったく使われていない。

Where my mitten? What the dollie have? Why you smiling? Why not he eat?

第3段階で記録された発話は次のようなものである。(yes/no 疑問文も引用する)

Does the kitty stand up? Did I saw that in my look?

Are you going to make it with me? Can I have a piece of paper?

Where my spoon goed? Where's his other eye? What I did yesterday?

How he can be a doctor? What he can ride in? Why kitty can't stand up?

この段階ではすでに第2段階で現れている名詞や動詞の屈折変化に加えて所有格, 動詞の3人称現在形が現れ, 文では単文だけでなく, 埋めこみ文などが使われる。yes/no 疑問文では助動詞 do が使われるが, Wh 疑問文で使用されることは非常に少ない。助動詞の倒置は使われず, be 動詞の使用は任意である。

第1段階から3段階までの疑問文の発達を概観してわかることは, 第1段階では疑問文は非常に単純な形である。yes/no 疑問文では上昇イントネーションを伴った Fraser Water? であり, Wh 疑問文では What that? のような型である。しかし McNeill (1970)によればこの時期にすでに幼児は yes/no 疑問文と Wh 疑問文が区別でき, 実際に See hole? What doing? と使いわけることもできるという。

第2段階で幼児は平叙文の文頭に Wh 疑問詞を付加して Wh 疑問文を作っている。第3段階で幼児は助動詞を使うようになっており, yes/no 疑問文では助動詞と主語の語順の転換も行われているにもかかわらず, Wh 疑問文ではそれがなされないでいる。

この時期の幼児は yes/no 疑問文での助動詞, 主語の倒置はうまく行えることを示しているが, Wh 疑問文の場合には Wh 疑問詞を文頭へ移動することはできるが, 助動詞, 動詞の語順転換の変形が出来ないでいるとも考えられ, 二つの変形操作を同時に行う運用力が未だ備わっていないと推定できそうである。

Menyk (1969) は2才10か月から3才までの幼児に次のようなステップで Wh 疑問文の

発話が記録されたと言う。

1. Where (goes) the wheel (goes)? 2. Where the wheel do go?
3. Where does the wheel goes? 4. Where does the wheel go?

2.2 外国語として英語が習得される場合

これについてはまず Ravem (1970) の資料を引用したい。彼は Brown (1968) の Wh 疑問文についての研究の上に立って、英国留学中にノルウェー語を母国語とする自分の息子（6才半）と娘（9才）の Wh 疑問文の発達を5か月余にわたって記録したのである。

彼はここで成人の文法では変形の中間段階にしか生じない型、「仮説的中间構造」が実際に2人の子供の外国語習得の過程に現れるかどうかを調べようとしている。そしてもしもこの仮説的中间構造が子供たちの言語発達のプロセスに存在するならば、変形のプロセスは言語発達を説明できることになるとする。

彼が Wh 疑問文について説明する変形操作を理解しやすいように簡単にすると次のようになる。

1. John will read what? (ここへ Wh 疑問詞の文頭移動の操作が加わる)
2. What John will read? (ここへ語順倒置の操作が加わる)
3. What will John read?

そして、1の型を「仮説的中间構造1」とし、2の型を「仮説的中间構造2」とした。はじめに6才半の Rune のもの続いて9才の Reidun の発話の記録を見る。

Time 1 What is that? What you eating? Why you say that before?

Time 2 (2週間後) What Jane give him? What you think Pappy-name is?

Time 3 (3～4週間後) What he's doing? What is he doing? What you did in Rothbury? How did you do-have do-what you do on school last week?

Reidun 3:1 (英語に接して3.1週) What this? 4:0 Where find it? 4:4 Whats that? 6:0 What that is? 6:2 What all that man? 6:3 Which one you want? What do you want? 8:0 Where is it then? Why you can't? 9:3 What are he doing now, then-that man? Why isn't that lady there?

これらの資料を一見して理解できることだが、彼の言う仮説的中间構造1は発見できないが、What John will read 型の構造は多くその発話に含まれていることがわかる。そして Ravem は変形規則の心理的実在が存在することについて結論的なことは何一つ言えないが、変形の記述自身がテスト出来る仮説を作りあげることが可能にしているとする。

その他に南米系の6人の被験者(5才から33才)の発話を記録した Schumann 他 (1978) の研究でも、被験者全部に語順倒置のない Wh 疑問文が見られる。しかし時に倒置された Wh 疑問文が、倒置されない疑問文が現れる前に発話されることもあると報告している。

今まで引用して来たものはすべて個人を対象にした longitudinal な調査の結果であって集団を対象にしたものではない。集団、そして成人を対象にした Wh 疑問文の発達について調査したものに Bailey 他 (1976) のものがある。

Bailey らは、12か国から来た48人の成人に、3種類のテスト 1. production (絵を使用) 2. imitation (16の文を使用) 3. intuition (50問) を行った結果、学生たちの誤りについて

次のように報告している。それによると、誤りには、助動詞の脱落と語順倒置をしない二つの型があり、語順倒置ができない誤りの型は助動詞脱落の誤りの型より後に生ずる型であろうとしている。

今まで Wh 疑問文が母国語として習得される場合と、外国語として習得される場合について述べて来たのであるが、その習得の過程について果して $L_1=L_2$ かという疑問が生れるかもしれない。しかし Klima と Ravem の記録からも $L_1=L_2$ という仮説は基本的に正しいと思われる。この点については Milon (1974), M. Gillis, R-M. Weber (1976) 参照。

以上述べて来たことを基礎にして、筆者がすでに試みた調査「語順からみた誤り」の中の Wh 疑問文について再検討する。

3. Wh 疑問文の語順からみた誤り

3.1 調査の方法

被験者は、中学2年生40名、高校1年生41名、高校2年生（成績下位生）13名、計94名
テストの方法（表1参照）は理解力テストであり、Corder の言う Error Avoiding Test である。

表1 問題文の一部

1. ぼくのスプーンどこへいったのだろう。	2. ぼくきのう何したろう。
1. My spoon went where?	1. I yesterday what did do?
2. Where my spoon went?	2. I did yesterday what?
3. Where did my spoon go?	3. What I did yesterday?
4. My spoon where did go?	4. What did I do yesterday?
3. バット何本ある？	4. どうしてねこ立てないの？
1. You have bats how many?	1. The cat can't stand up why?
2. How many bats you have?	2. Why the cat can't stand up?
3. Bats how many do you have?	3. Why can't the cat stand up?
4. How many bats do you have?	4. Why the cat stand up can't?
5. どんなくだものが好き？	6. だれがピアノひくの？
1. Which fruits like?	1. Who plays the piano?
2. You like which fruits?	2. Plays the piano who?
3. Which fruits you like?	3. Who does play the piano?
4. Which fruits do you like?	4. Who the piano does play?

3.2 結果と考察

例えば問題1を例にとると My spoon where did go? を選択した者は日本語語順型誤りとし、My spoon went where? これは Ravem の言う仮説的中间構造1であるが、この型を Wh- 後置型誤りとし、Where my spoon went? 仮説的中间構造2、を变形未完型としてそれぞれの誤りの型を調べると中学2年生では20%~30%位の間に3つの型が混在しているように見える。高1と高2の低位生のグループの誤りはそのほとんどが、変形未完型、いいかえれば、語順倒置がされていない型である。

表2 誤答数に対する誤りの型の割合

(割合)

誤りの型		0	I	II	総 数
グループ					
中	2	19 (27)	20 (28)	32 (45)	71
高	1	1 (2.5)	1 (2.5)	37 (95)	39
高	2 (低)	3 (8.6)	0	32 (91.4)	35

表3 (1) 0型(日本語語順型)誤り (日本語語順型) (人数と割合)

問題		1	2	3	4	5	6
グループ							
中	2	2 (5)	4 (10)	2 (5)	5 (13)	5 (13)	1 (3)
高	1	1	0	0	0	0	0
高	2 (低)	1	0	0	1	1	0

(2) I型 (John will read What?) 型の誤り (Wh-後置型)

問題		1	2	3	4	5	6
グループ							
中	2	5 (25)	3 (7.5)	0	4 (10)	6 (15)	2 (5)
高	1	1	0	0	0	0	0
高	2 (低)	0	0	0	0	0	0

(3) II型 (What John will read?) 型の誤り (変形未完型)

問題		1	2	3	4	5	6
グループ							
中	2	11 (28)	8 (20)	3 (8)	3 (8)	2 (5)	5 (13)
高	2	8 (20)	7 (17)	1 (2)	13 (32)	1 (2)	7 (17)
高	2 (低)	8 (62)	7 (54)	5 (38)	8 (62)	1 (8)	3 (23)

限られた数の被験者であり、理解力テストという一つのタイプのテストだけではあるが、Klima や Ravem の資料には現れなかった「仮説的中間構造の1」の型が日本人の中学2年生の誤りの中になんとか多くあった事実は興味をひく。これは日本語の場合の疑問文は英語のような前送りの変形操作をする必要がないことから来ているのか、または日本語の疑問詞が文尾に置かれることから来る語順上からの干渉であるのか、いずれにしても中学2年生の段階ではこの種の Wh 疑問文の言語習得は発達中であり、過渡期であると言えそうである。Wh 後置型の誤りの中で How many 構文には誤りが全くないのも目を引く。

高校1年、高校2年(低位生)のグループは中学2年生のグループがそのまま移行するのではないが、誤りから見ると、中学生の日本語語順型誤り・Wh 後置型誤りは変形未完型誤りに発展し、さらに適切な制限が加わって正常な Wh 疑問文になるように思える。この点から見るならば、筆者の試みた誤答分析は、日本語語順型誤り・Wh 後置型誤りについて究明する余地があるが、Wh 疑問文の習得過程について Klima, Ravem 等のそれと一致する。

終りに一つ注目したいのは、高校2年のグループであるが、この生徒たちは英語に対して

意欲を失っているグループである。この生徒たちに2か月後に同じテストをしたが、前回のテストと誤りにほとんど差がなかった。この場合、彼らの誤りに「化石化」が生じているのではない。母国語習得の場合に環境から種々の制限や刺激が加わって誤りの化石化は生じないが、外国語学習の場合、誤りがそのまま定着してしまう危険がある。どうしたらそれが防げ、どうしたらそれを治療することが出来るか、解明されなければならない問題がある。

4. 主語把握についての学習者の方略

中学生が英文を理解しようとする時に主語がどれかを把握出来ないことから生じる困難がある。この調査は英語の構文の中心はS+Vであること、言い換えれば英語の主語の後には

表4 挿入位置よりみた誤答の結果(数値の多い順)

(*の位置に動詞をそう入)

順位	問題番号	テ ス ト 文
1	20	What * book on the desk?78%
2	23	A girl * fron America in our class.66
3	30	The book * on the desk Tom's.57
4	5	Those * books his.49
5	26	The first day * of the week Sunday.49
6	8	Those * books his father's.42
7	13	Our school * library good books.31
8	14	Which * pencil longer, mine or yours?30
9	10	This * car new.29
10	11	That * tall boy my brother.26
11	21	This * watch new.26
12	15	This * watch Mike's.24
13	2	Mike's camera this. *.....23
14	17	That school * library good books.23
15	7	Whose * doll bigger, Nancy's or Kate's?21
16	29	Whose bigger *, Nancy's doll or Kate's?21
17	1	That * boy my brother.19
18	19	Those red * flowers.12
19	4	Which longer *, mine or yours?12
20	16	Mike's * bat on the desk.11
21	23	A girl from * America in our class.11
22	6	This house five * rooms.9
23	7	Whose doll bigger *, Nancy's or Kate's?8
24	11	That tall * boy my brother.8
25	26	The first * day of the week Sunday.8
26	14	Which pencil longer *, mine or yours?8
27	25	This Mike's * watch.7
28	2	Mike's * camera this.7
29	9	These my * flowers.6

動詞が続くという一般的な原則に注目して、予め動詞を抜いてある文の適当な位置に動詞をそう入させることで、生徒に主語がどれかを判断させたものである。被験者は中学2・3年生247名である。正答率については2・3年生との間にほとんど差がなかった。

表4は誤答のそう入位置から見た結果で、誤答率2%以上58例中29例を示したのであるが、ここに示された誤りの類型から学習者が示した方略を考えてみたい。

まず第1の型、これは文頭の語(句)の直後にすぐ動詞をそう入する型であるが、表からも理解出来るように誤りの大部分を占めている。我々はこれを「This is 型」の誤りと考えた。彼らは文頭に主語が来るのは当然であるとして、This, What などが形容詞的に使用され、後に名詞を従えていても既習の「This is」の構文の規則を過度に一般化してこのような誤りをするのであろう。あるいは This is という形が Schumann の言う Memorized Chunk になっているがために 英文に違いがあるのにもかかわらずこういう誤りを犯すのかもしれない。

第2の誤りの型は、我々が「is new 型」と呼ぶものである。これの特徴は第1の型と違って、文尾の補語とか目的語に注目し、その語(句)の前に動詞をそう入するタイプである。

たとえば中学3年の男子生徒Y君の一見でたらめとも見える誤り：# This a is new watch. # My bag on is the desk. # The first day of is the week. # Those red are flowers. # This house five has rooms. も上記の考えで説明がつく。彼の場合は、This is の結びつきよりも is new の結びつきの方が強く感じられるのかもしれない。これらの誤りをする生徒は上位生ではないのだが、Klima の資料にあるように成人が What do you want? と質問すると Need some chocolate. と名詞句ではなく動詞句全体で答える幼児のタイプと何か関連があるかもしれない。

第3に動詞を何でも文尾に持っていく誤りがある。これは動詞が文末に来るという日本語からの干渉から来る誤りであるかもしれない。ただ問題2では3年生にこの型の誤りが多いのであるが感嘆文を学習した後のため動詞を文尾に置いたのかもしれない。

学習者の外国語に対する攻略の仕方を知るには集団に対する調査と共に誤りをした個人の調査が必要であることが痛感された。上述の「is new 型」の発見も、英文を理解する時にその英文の構造や文法性に関係なくまず「日本語で意味の通る文」にしようとする中3、女子生徒Wさんの例も個人の面接がその発見の糸口となった。

参 考 文 献

- Bailey, N., Eisenstein, M., Madden, C., 1976. The Development of Wh-questions in adult second language learners. On TESOL '76, 1-9.
- Burt, M.K., 1975. Error analysis in the adult EFL classroom. TESOL 9, 56.
- Cancino, H., Rosanky, E. J., Schumann, J.H., 1978. The acquisition of English negative and interrogatives by native Spanish speakers. In Hatch(ed) Second Language Acquisition. Rowley: Newbury House. 207-230.
- Corder, S. P., 1975. The language of second-language learners: The broader issues. MLJ LIX, 409.
- Corder, S. P., 1978. Error analysis. In Kinseller(ed) Language Teaching and Linguistics. Cambridge Univ. Press.

- Gillis, M., Weber, R-M., 1976 The emergence of sentence modalities in the English of Japanese-speaking children. *Language Learning* 26. 77-94.
- Klima, E. S. and Bellugi, U., 1966. Syntactic regularities in the speech of children. Lyons, J. and Wales R. J. (ed) *Psycholinguistic Papers*. Edinburgh: Univ. Press.
- McNeill, D., 1970. *The Acquisition of Language*. New York: Harper and Row. 96.
- Menyuk, P., 1969. *Sentence Children Use*. MIT. 73.
- Milon, J., 1974. The development of negation in English by a second language learner. *TESOL*, 8.137-143.
- Ravem, R., 1974. The development of wh-question in first and second language learners. In Richards (ed) *Error Analysis*.
- 諏訪部 真 1977. 「語順からみた誤り——否定文・疑問文を中心にして——」『長野高専紀要』8. 85-94.
- 諏訪部・小森・中村・吉沢・堀内・和田 1979, 「語分析の実際——中学2・3年生の主語把握について——」『長野高専紀要』10. 67-74.